

半年経った中国での生活

河野 有紀

昨年の9月に、初めて海外を体験と同時に中国へ留学してきました。来たばかりのときはカルチャーショックで、親や日本の友人に泣きごとを漏らしていましたが、一週間もすれば順応してきました。私にとって外国というのは、本やテレビでしか見たことのない未知の世界でした。目にするものすべてが珍しく、食べ物もすぐに試してみたいものばかりでした。

日本の大学で中国語をそれなりに勉強してきたつもりでしたが、実際は全く聞き取れず話せずという状態で、いつも電子辞書を片手に出かけていました。太原市は外国人が少ないため、私が日本人だと分かるというんな人が話しかけてくれました。政治がらみで日中の関係は良好とは言えませんが、個人同士では全くそんなことなく、むしろ日本についてとても興味をもってくれていました。日本の漫画やアニメは知らない人がいないというぐらい人気があります。また山西大学や別の大学の学生たちと連絡を取り合い、一緒に出かけたり、ご飯を食べたりしました。一方で、私が日本人であることを利用して、別の目的を持って関わってこようとする人もいるということを経験の中で知りました。

休日は、同じように留学している友人たちと旅行や観光に出かけました。内モンゴルでは本当の星空とも言えるきれいな夜空を見たり、北京では故宫などの歴史的な建物や現代的な街並みを見たり、太原市内の観光地晋祠公園（ジンツーゴンユエン）では大きなお寺や、岩に直接彫られている顔や手のない仏像を見たりしました（なぜ顔や手がないかというと、大昔に盗賊によって削り取られたから）。

この半年、中国で生活をしてきて感じたことは「完璧を求めてはいけない」ということです。日本のように時間をきっちり守ることや丁寧な対応を求めているのはイライラするだけだということに気がきました。のんびりとした中で、日本人らしい生活も忘れず、過ごしていこうと思いました。



休日、大学の中庭での様子